藤原宮東面内濠 SD2300 出土土器（1）

―第24次調査から

1　はじめに

現在、考古第二研究室では土器基準資料の再整理を進めており、今回は飛鳥Ⅴの基準資料である藤原宮東面内濠SD2300出土土器のうち、第24次調査（『藤原概報９』）で出土した資料について報告する。出土した土器は供膳具だけでも整理用木箱70箱以上に上り、内容も多様である。今回は整理の進んでいる供膳具を対象とし、報告する。

2　藤原宮SD2300の概要と出土土器

藤原宮SD2300は宮東面大垣の西方約12mに位置する大垣の内濠で、今回報告する第24次調査では長さ約41m分を確認している。溝は幅2.2m、深さ0.7mで、層位は大きく上・中・下層の３層に分けられ、下層の灰色粘土層からは多量の土器とともに木簡など木質遺物が出土している（『藤原概報９』）。出土した土器は溝全体からまんべんなく出土するのではなく数ヵ所に集中して確認されており、同様の状況は木簡の出土状況でも指摘されている（『藤原宮木簡二（解説）』）。３層全てに接合関係があり型式差も認められないことから、一括して報告する。

土師器　杯Ａは杯ＡⅠ（23～51・96～104）・杯ＡⅡ（19～22・107・109～112・139）・杯ＡⅢ（13～18）がある。器形は椀状のものや箱形を呈するもの、丸底気味で口縁部が外反するものや平底の底部から口縁部が直立するものなど多様である。暗文構成は、ほとんどが二段放射暗文（以下「二段暗文」とする。）であるが、一段放射暗文（以下「一段暗文」とする。）（19）、一段＋連弧暗文（以下、連弧暗文とする）（17・18・51）、無暗文（96～104・107・109～112・139）があり、出土するもののうち一段暗文や連弧暗文は、暗文が確認できる個体62点中、前者が１点、後者が４点ときわめて少ない。なお、二段暗文の個体には、下段の放射暗文を底部中央から口縁部下半までの範囲で施すものが確認でき（13・23～26）、その結果、上段の放射暗文の幅が広くなっている。調整手法は実測個体63点中ｂ1手法が33点と約半数を占め、中には体部中位あるいは口縁部近くまでケズリを施すものも存在する（23・33～35）。杯Ｂは杯ＢⅠ（10）・杯ＢⅡ（７～９・11）があり、暗文は一段暗文（10・11）と二段暗文（７～９）がある。高台は断面が三角形状のもの（７・11）と方形あるいは撥形状のもの（８・９）がある。杯Ｂ蓋は杯ＢⅠ蓋（１～４）・杯ＢⅢ蓋（５・６）があり、頂部外面は分割ミガキ調整を施す。つまみは扁平な逆台形状を呈する（４・５）。杯Ｃは杯ＣⅠ（80・81）・杯ＣⅡ（66～79・138）・杯ＣⅢ（53～65・131～133）がある。器形は丸底状のものが主体だが、浅身で皿状を呈するもの（75～77）も確認できる。暗文は一段暗文が主体である。その他に、二段暗文（81）、連弧暗文（78～80）、無暗文（131～133・138）も存在するが、連弧暗文は全43個体中４点とわずかである。調整手法はａ0手法が大半だが、ｂ0またはｂ1手法もあり（78・80・81）、ｂ手法は杯ＣⅠ・ＣⅡに多い。なお61は底部にロクロケズリを施す。杯Ｄ（105・106・108）は、箱形の器形で口端部内面を肥厚させる。105はｂ3手法、106・108はｂ1手法。杯Ｇは杯ＧⅠ（134・135）・杯ＧⅡ（119～130）・杯ＧⅢ（113～118）があり、口縁端部の形態には内傾する面をつくるものが多いが、丸くおさめるもの（117・118・127・129・134）も一定量ある。杯Ｈ（136・137）は、いずれも口端部内面に面をもつ。

高杯Ｃ（52）は杯部底部内面に螺旋暗文を施す。皿Ａは皿ＡⅠ（184）・皿ＡⅡ（88～90・181）・皿ＡⅢ（82～87・175～180・182・183）がある。器形は、丸底で体部が緩やかに屈曲するもの（82・83・86・89・90・176・178～180・182）と、平底状で体部が強く屈曲して立ち上がるもの（84・85・88・175・177・181・183）がある。暗文構成は、一段暗文のほかに、二段暗文（86）と無暗文（175～184）がある。調整手法はａ0手法とｂ0手法がほぼ同数で、わずかにｂ1手法が存在する。皿Ｂは皿ＢⅠ（185～191）・皿ＢⅡ（91～94）・皿ＢⅢ（12）があり、暗文構成は一段暗文（91～94）、連弧暗文（12）と無暗文のもの（185～191）がある。暗文をもつ個体のほとんどが外面にミガキを加える。185～189はいわゆるロクロ土師器であり、いずれもロクロ成形後、底部から口縁部下半にかけてロクロケズリを施す。なお、ロクロ土師器は杯Ｃ、椀Ｚ、鉢Ａにも各１点確認できる（61・174・194）。盤Ａ（95・192）は、95が底部に螺旋暗文、口縁部に連弧暗文を施し、外面をｂ1手法で調整する。192はｂ0手法である。両者とも口縁端部に面をもつ。鉢Ａ（193・194）は丸底に近い器形で、193が体部に縦方向のハケメの後、ケズリと

図131　SD2300出土土師器供膳具（1）　1：4（26は第27次調査出土）

図132　SD2300出土土師器供膳具（2）　1：4（75は第27次調査出土）

ヘラミガキを施す。194は胴部下半にロクロケズリを加える。

以下に報告する杯Z、椀Zは従来独立した器種分類名を提示していない器種だが、SD2300からまとまった量の出土をみたため、仮の器種名称として設定した。正式な分類名は、今後、他資料の整理を進め、体系的な器種分類を経た後に提示する予定である。杯Z（140～160）は小さな平底から口縁部が丸みをもって立ち上がり、底部から体部外面に手持ちヘラケズリを施す。口縁部外面に粗いミガキあるいはヨコナデを施し、内面に暗文はない。含有物をほとんど含まない精選された胎土であることも特徴的である。杯ZⅠ（152～160）・杯ZⅡ（140～151）があり、口縁端部の形状は、内面に面をもつものや、断面が方形を呈するものなど多様である。なお151

図133　SD2300出土土師器供膳具（3）　1：4

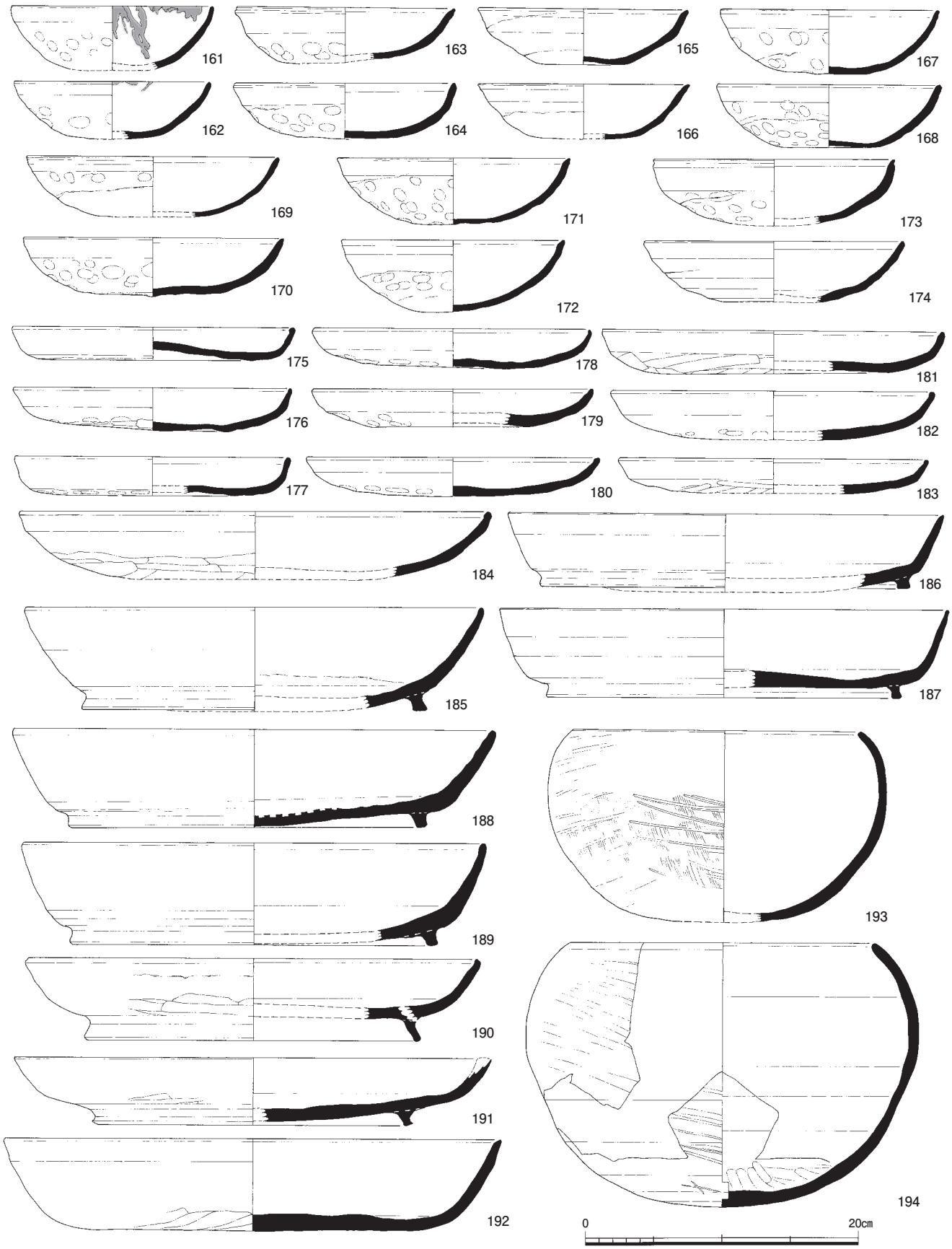

図134　SD2300出土土師器供膳具（4）　1：4

は、内面に稚拙な一段暗文を施す。椀Z（161～174）は、平底状の小さな底部から口縁部が丸みをもって立ち上がる。口縁端部内面に内傾面をもつものが多い。外面に輪積痕や指オサエの痕跡が明瞭に残り、胎土に大粒の白色粒や赤褐色粒を多く含む点も特徴的である。椀ZⅠ（169～174）・椀ZⅡ（161～168）がある。

なお、41は底部内面に「×」、33は口縁部外面に「＊」、70は口縁部外面に「＋」、60・194は底部外面に「＋」の

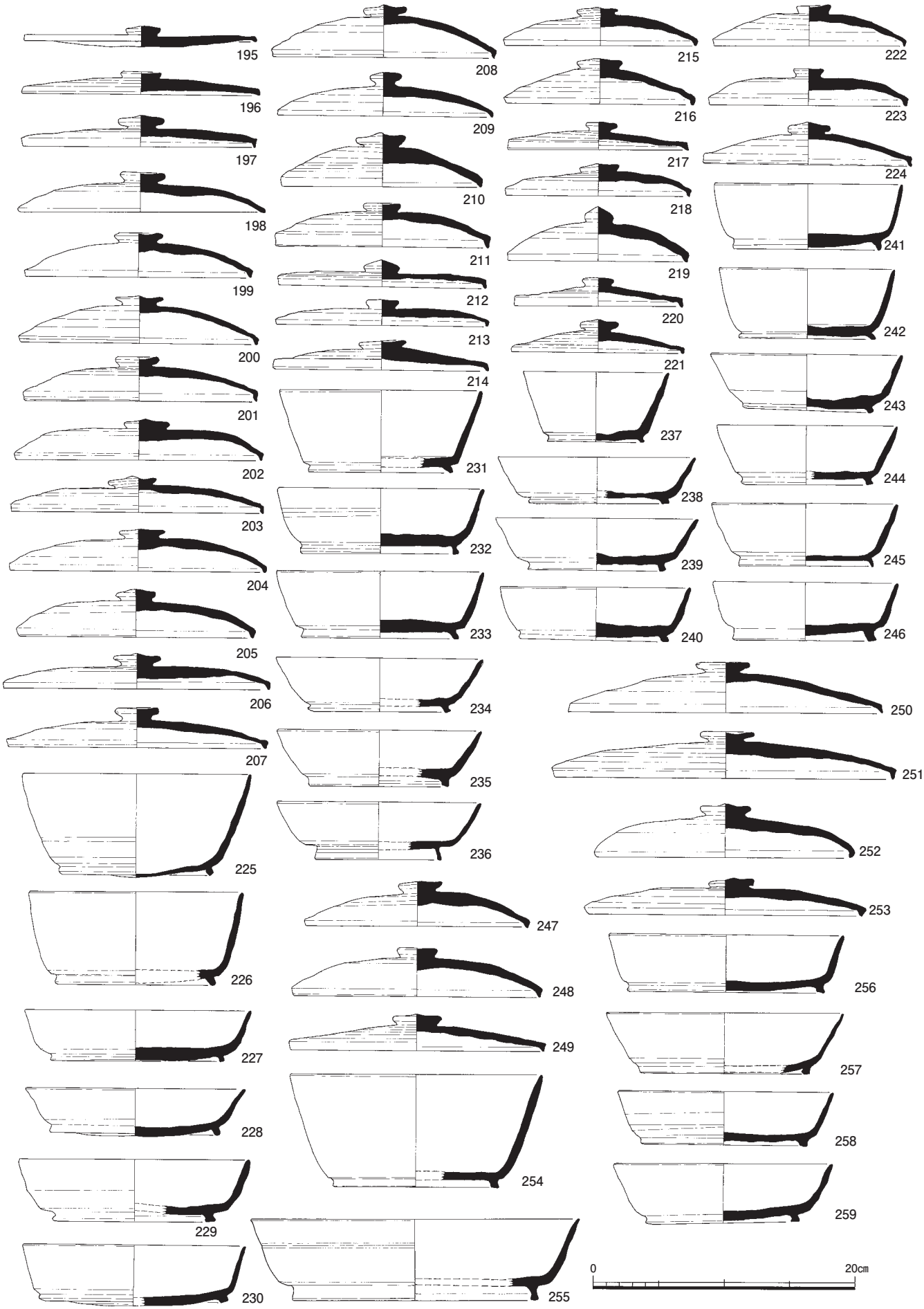

図135　SD2300出土須恵器供膳具（1）　1：4

図136　SD2300出土須恵器供膳具（2）　1：4

刻書を施す。また115・161・162は灯火器として使用されている。

須恵器　杯Ａは杯ＡⅠ（287～292）・杯ＡⅡ（273～286）・杯ＡⅢ（265～267・270～272）・杯ＡⅣ（260～264・268・269）がある。深身の個体（260・279・284・287～290）が多いが、浅身のもの（280～283・285・286・291・292）も一定量存在する。底部はロクロケズリを施すものがほとんどであるが、手持ちヘラケズリ（261）やナデ（266・285）を施すものも少量ある。杯Ｂは杯ＢⅠ（225～230・254～259）・杯ＢⅡ（231～236）・杯ＢⅢ（238～246）・杯ＢⅣ（237）がある。器形は、深身のもの（225・226・231～233・237・241～246・254・255）と浅身のもの（227～230・234～236・238～240・256～259）がある。底部はロクロケズリを施すものが大半だが、ナデ（235・238・243）や不調整（237・239・258・259）のものもある。杯Ｂ蓋は杯ＢⅠ蓋（195～207・248・249・252・253）・杯ＢⅡ蓋（208～214・247）・杯ＢⅢ蓋（215～219・222～224）・杯ＢⅣ蓋（220・221）がある。頂部形態は扁平なもの（195～197・213・214）、器高がやや高く直線的にのびるもの（207・217・220・221・224・249）、ドーム状を呈するもの（198～201・203・204・208～211・215・216・219・222・247・248・253）、頂部中央が水平で口縁部へ向け「ハ」字状に開くもの（202・205・206・218・223・252）があり、この他にも頂部に段をもつものがある（212）。頂部にはいずれもロクロケズリを施す。椀Ａには椀ＡⅠ（294・298）・椀ＡⅡ（293・295～297）があり、底部にはロクロケズリ（293～296・298）あるいはナデ（297）を施す。皿Ａは、皿ＡⅠ・皿ＡⅡを『藤原概報 9』で報告しており、今回図化した資料には皿ＡⅢ（299～301）・皿ＡⅣ（302）がある。皿ＡⅢは底部が丸底状、皿ＡⅣは平底状を呈する。いずれも底部にロクロケズリを施す。皿Ｂは皿ＢⅠ（305）・皿ＢⅡ（303・304）がある。皿ＢⅠは体部の屈曲が緩やかなのに対し、皿ＢⅡは体部から口縁部へ向けて直立する。いずれも底部にロクロケズリを施す。250・251は皿Ｂ蓋。306は長脚の高杯で、307の杯部は、体部から口縁部にかけて緩やかに内弯する。鉢Ａ（308）は口縁端部を丸くおさめ、底部は平底である。

なお、杯Ｂ蓋の202・204には内面に墨痕が確認でき、214は転用硯である。221は頂部内面に「Ｄ」字状、241・270は底部外面中央に「－」、284は底部内面に「－」、256は底部外面に「＝」、286は底部外面に「＃」状のヘラ書きをそれぞれ施す。287の底部外面には「部」の刻書があり、字形は「ア」に近い。

表20　藤原宮第24次調査 SD2300出土供膳具の器種構成

土師器			須恵器		
器種	個体数	比率（%）	器種	個体数	比率（%）
杯Ａ	103	27.7	杯Ａ	54	29.8
杯Ｂ	12	3.2	杯Ｂ	60	33.1
杯Ｂ蓋	27	－	杯Ｂ蓋	92	－
杯Ｃ	47	12.6	杯or椀	13	7.2
杯Ｄ	3	0.8	皿Ａ	17	9.4
杯Ｇ	50	13.5	皿Ｂ	6	3.3
杯Ｈ	2	0.5	椀Ａ	19	10.5
杯Ｚ	57	15.3	鉢Ａ	1	0.6
皿Ａ	33	8.9	高杯	9	5.0
皿Ｂ	26	7.0	盤Ａ	2	1.1
椀Ｚ	32	8.6	合計	273	100.0
鉢Ａ	3	0.8			
高杯Ａ	1	0.3			
高杯Ｃ	1	0.3			
盤Ａ	2	0.5			
合計	399	100.0			

※杯B蓋は比率の算出からは除外する。

３　まとめ

第24次調査のSD2300出土供膳具について、『藤原概報９』で報告した土器を含め、口縁部が８分の１以上残存するものを対象に個体識別をおこない、組成を求めた（表20）。供膳具の個体数は土師器399点、須恵器273点でありその比率はおよそ３：２である。土師器では暗文を施さない土器（図133・134）が比較的多く、全体の４割近くにおよぶ点は注目される。また土師器・須恵器ともに皿や高杯が少ない点も指摘できる。ただし、これらの数値は第24次調査出土のもののみで、第27・29次調査出土分は含んでおらず、廃棄場所の違いによる器種構成の偏りを示す可能性がある点は留意する必要がある。

また、土師器杯Ａや杯Ｃ、皿Ｂにおいてわずかながら連弧暗文が確認でき、平城宮土器に繋がる要素が既に出現している。一方で、平城宮ではほとんど出土しない、外面をヘラケズリで仕上げる粗製の土師器が一定量出土するなど、飛鳥から平城への過渡的な様相を示すこともあきらかになった。さらに、土師器・須恵器ともに器形、胎土が多様であり、多くの生産集団あるいは生産地からの供給を受けていた可能性が高い。今後、貯蔵具・煮炊具を含め、さらに資料の整理を進めていきたい。

（高橋　透／宮城県多賀城跡調査研究所）